

# 伝え

日本口承文芸学会 会報

【伝え】 第36号 2005年1月

発行 日本口承文芸学会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 古典文学第4研究室内

TEL/FAX 042-329-7246

## ある離島の変貌

大島 建彦

これまで何となく機会に恵まれなかったのに、思いがけなく今年（2004年）の5月末には、はじめて愛知県の日間賀島をおとずれることができた。2500人ほどの小さな島で、漁業と観光とによってなりたっているが、知多半島の先端の師崎からは、高速船で10分しかかからないところにある。戦時中の昭和13年には、瀬川清子氏がこの離島の民俗の調査に入られて、終戦後の昭和26年には、『日間賀島民俗誌』という記録を出しておられる。それから数十年の間には、この島の人々のくらしが、いったいどのように変わってきたのか、何よりも心ひかれることであった。

今日の日間賀島というのは、国土交通省の担当者などからは、まさに離島の模範生としてたたえられている。それはなぜかという、漁業と観光という二つの面が、まことにみごとな調和をたもちながら、この島の振興をささえているからだという。日間賀島の漁業協同組合は、多数の若年層の加入によって、県内で随一の組合員数を誇っているのであるが、たしかに、この島の漁業のいとなみは、希望にあふれ活気に満ちているように見うけられた。

そこで、瀬川氏のしるされたことについて、実地にくらかでも確かめようとする、そのようなものがたりしきたりなどは、もうほとんど忘れられかかっていたのにおどろかされた。この島の1年間の神事は、毎年2人ずつえらばれて3年間つづけてつとめる、あわせて6人の禊人（とうにん）という役を中心におこなわれたはずである。しかしながら、昭和60年をかぎり、この禊人の制度はやめになって、これまでのいくつかの神事が、氏子総代などの役員にうけつがれているにすぎなかった。

たとえば、1月1日の昼前には、タコのサンボウをいただく式があったというが、そのようなタコ祭りというものは、すでにまったく忘れられていた。1月2日の浜祭りに、甘酒とぼた餅とを供え、また1月3日の屋形祭りに、お神酒と干ダコとを供えることは、神社の社殿の中につづいて、何とかその形式だけをとどめている。それとは別に、夏休みの8月12日には、観光用のイベントとして、タコの神輿をかつぐことが始められ、むしろそちらの方が、この島のタコ祭りとしてもはやされている。

瀬川氏の『日間賀島民俗誌』には、「アヲガヤマといふ所は、昔、イホリを作つて、食料をあてがつて老人を捨てた所だと云ひ伝えられてゐる」としるされているが、この姥捨ての伝承をおぼえている人にもめぐりあえなかった。わずかに、東西の二集落の境界に近く、コレラの患者を捨てた谷があったと教えられただけであった。

（東京都）

## <各地からの報告>

### 日本のグリム・佐々木喜善展

石井 正己

岩手県の遠野市立博物館では、今年(平成16年)の秋、第49回特別展として、「日本のグリム・佐々木喜善展」を開催した。喜善については、昭和61年の第14回特別展でも、生誕100年を記念して、「佐々木喜善—文学から民俗学へ—」を開いたことがあった。それ以来、18年ぶりで、再び喜善を正面から取り上げたことになる。

この展示が成り立つまでには、地道な積み重ねがあった。最初の特別展の前から、博物館では、『佐々木喜善全集』を発行しはじめた。そこには、『老嫗夜譚』『聴耳草紙』をはじめ、雑誌・新聞に掲載された報告や論考、明治37年から昭和8年の日記、柳田国男あての書簡を収録し、全4巻になった。そうした実績が遺族の信頼を得て、2000点を越える資料のすべてが寄託されたのである。

今回の特別展を「日本のグリム」と命名したのは、盛岡出身の言語学者・金田一京助がグリム兄弟になぞらえて、喜善をそう讃えたことによる。それを受けて、短い人生ながら多岐にわたった活動の中でも、特に、『遠野物語』から昔話研究へ展開したところに重点を置いて構成した。その結果、喜善の人生は昔話研究が生まれる胎動であり、伝承者が研究者になる始発だったことが明らかになった。

喜善の仕事を先駆けとして、日本では、口承文芸研究の基礎が作られた。だが、多くの文献の価値は十分に自覚されないままに、一次資料の多くは破棄されようとしている。そうしたことを考えるならば、没後70年以上にわたって資料を守ってきた意志は、驚きに値する。これから、この貴重な遺産を永久に保存し、一方では広く閲覧できるようなシステムを急いで作らねばならない。

なお、特別展にあわせて、『日本のグリム 佐々木喜善』の図録が作られている。それには、「日本のグリム・佐々木喜善」の解説のほか、「年譜」「書誌」「研究文献目録」が入っている。この図録は、今後、口承文芸研究における基礎的な文献になるだろう。購入を希望される場合には、遠野市立博物館(電話0198(62)2340)で受け付けている。1冊2000円、送料は350円。

(東京都)

## 「全国交流大会 in 荘川」

### 日本民話の会

日本民話の会は、二年に一度、全国の会員による交流会を各地で開催している。目的は、まずは会員の交流にあるが、加えて、その土地に民話運動の種をまき、あるいは土地で活躍中の人々に協力を願って、互いの見聞を広めることにある。そしてできれば、土地の語り手の語りを聴かせていただく。今回は岐阜県大野郡荘川村で村の読書サークルの人々と共に行なった。目的は十分に達せられた。

八月二十七日から二泊三日。参加者は、宮城県から福岡県までの七十四名。人口約千四百人の村とて、大きな旅館はなく、四軒の旅館に宿。一日目の全体会、吉沢和夫さんと宮川ひろさんの記念講演は村のイベント館、夕食をかねた懇親会は、すこし離れた福祉センターに移動、出前の料理で開催した。土地の人の珍しい民謡や、中学生の若々しい獅子舞が、荘川村を実感させてくれた。

二日目は、荘川村の伝説ツアー。御器洗い淵(椀貸し淵)山猿退治に使った刀を祀った祠(猿神退治)村の木淵(蜘蛛淵)など、多くの伝説の地を目の当たりにする。おまけに世界遺産でもある隣村の白川郷を見学。引率は村のメンバー。そのために勉強もしマニュアルまで用意して下さったのだった。そして夕闇せまる頃、各宿での夕食を終えて、「荘川の里」に集まった。村内の古い民家を数軒移築して保存されている。中でも豪壮な二軒をお借りして、土地に伝承される語り「はと汁」「又左衛門がっぱ」「あんころもち小僧」などを聴かせていただいた。囲炉裏を囲んでの、まさに非日常の世界にひたることができた。宿にもどってからは、今度は、参加者同志の「語りっこ」で夜がふけた。

最終日三日目は、再びイベント館に全員集合。松谷みよ子さんの記念講演「伝承と創作 - 『死の国からのバトン』のことなど」。作者の血の中に流れる祖先の血と、現代の公害を射る眼差しが交差して、生まれた物語だという。各地で取材した伝承行事も重要な要素になっていた。伝承を見つめる姿勢のありようを教わった。

この度の成功は、全て、役場の人たち、読書サークルの人たちの、実に綿密で力強い協力の賜物であったといわなくてはならない。移動の多かった3日間の送迎も、村の車で支えていただいたことだった。(東京都)

## 第7回全日本語りの祭り

櫻井 美紀

2004年10月2日と3日の2日間、【全日本語りの祭り】が静岡県の伊豆市修善寺で開催された。この祭りは隔年に開催される語りを楽しむお祭りで、第1回は1992年に秩父市のホテルを会場として行われた。今回は、その第7回に当たる祭りで、開催地が修善寺とあって予想以上の人気を集め、延べ1500人の参加者を迎えて賑わった。

今回に至るまでは山形県南陽市、山口県徳山市、沖縄県那覇市、群馬県桐生市、鳥取県境港市で開催され、年々参加者数を増し、語り愛好者にとっては楽しみなお祭りとなってきた。主催者は、初めの10年は実行委員会の主催、第6回から【全日本語りネットワーク】(運営委員長佐藤涼子)という新しい組織が地元の実行委員会との共催で運営している。各地の自治体も後援という形で資金面の一部をになうが、実行は全て地元市民による運営委員とボランティアの活動で支えられる。

さて、今回第7回の特徴は、伊豆市の誕生を記念するイベントの意味もあり、新生伊豆市の中心となる由緒ある温泉地の修善寺町が祭りの舞台となったことである。岡本綺堂の『修善寺物語』で文学的に有名な修善寺は本堂修復中だったが、本堂横の檀信徒会館を使用させていただいたほか、明治時代に建てられた文化財的な旅館を祭りの会場に使わせていただき、格式のある旅館宿泊の魅力と、文学と歴史の香りにつつまれた祭りの演出が出来たことであった。

招待された語り手の語りは4話だった。この祭りの主旨は一般の参加者が語って楽しみ、聞いて楽しむ“語りのお祭り”であったから、2日間にわたって語りの会場は数多く用意された。修善寺町総合会館をはじめとして語り場は述べ26会場、一般参加者の語った語りは民話が約300話のほか、創作、詩、紙芝居などで、語られたタイトル数は412と報告された。

次回の【全日本語りの祭り】は2006年10月に福島県津若松市で開催が決まっている。語り手の一人としては、大変楽しみなことである。

(東京都)

## 子どもの語り教室と市域を越えた語りのつどい

根岸 英之

2004年11月～12月にかけて、市川民話の会は、NPO法人いちかわ市民文化ネットワークの呼びかけに賛同する形で、文化庁委嘱・財団法人伝統文化活性化国民協会助成事業「市川市伝統文化子ども教室」の一つとして、「民話語りコース」の企画に携わった。

これは、茶道、三味線など、日本の伝統文化を子どもたちに体験してもらおうという趣旨で企画されたもので、その一つに「市川に伝わる民話を子どもたちに聞いてもらい、語れるようになろう」というコースを設定したものであった。

参加した子どもたちは、小学2年生から6年生までの11名。題材として、市川に伝わる「いんねえのじゅえむどん」の笑い話の中から、子どもたちが語りやすいような話を10話設定し、全5回の講座形式で行った。ちょうど、会場として使用した旧片桐邸という施設が、市川市と東接する船橋市との市境近くに建つ寄贈民家で、その主催講座として市川と船橋の双方の民話を伝える講座を設けたいとの声もあったため、同時期に「中山の民話のつどい」という一般向けのつどいも設け、そこに子どもたちも参加してもらおう形を取った。

《語る》には《聴く》営みが重要であり、子どもたちは、市川民話の会や船橋の民話をきく会の大人たちが、語る民話に耳を傾ける機会が多くなったことで、より自分たちの語りのイメージ化につながったようだ。子どもたちには、配られたテキストをそのまま覚えるのではなく、自分の語りやすい言い回しに替えて語れるように促した。多少の発声練習なども行ったが、基本は相手に聴こえる声で語ろうということで、あまり演劇的な指導はしないように心がけた。

発表会には、大勢の聴衆が集まり、姉妹二人で一つの話の語ったり、同じ話でも、子どもたちなりの個性が出た語りに仕上がった。年明けにも、別の語る機会に参加してもらおう予定でいる。

新たな口承文芸伝承の場へと、研究と実践のまなざしが求められているといえよう。

(千葉県)

## 第2回いちかわ市民ミュージカル

「手鞠うた 風にのって-袖かけの松より」公演  
米屋陽一

2004年9月12日、「三代市民の文化交流と地域のつながりをもとめて」市民手作りのミュージカルが、昼・夜2回、市川市文化会館で上演された。作・作詞・演出／吉原廣、作曲／飯田満、指揮／佐藤宗男、演奏／市川交替吹奏楽団他、企画・制作／いちかわ市民ミュージカル実行委員会。

市川市宮久保にある白幡神社には「袖かけの松」と呼ばれている伝説の松が坂道に枝をのばしていた。この坂道は雨が降ればたちまちぬかるみと化し住民を困らせていた。滑って転ぶとたたきがあると恐れられていたが、袖をちぎって枝にかけると難を逃れるとも伝えられていた。

戦後の1950(昭和25)年、市内の道路拡張工事に伴い袖かけの松も伐られることになった。樵(こびき)たちはたたきを怖れていた。結局は腕のいっし樵に伐り倒された。その時、小学校入学直前の少女が下敷きに

なり亡くなった。樵は少女が入学するはずであった八幡小学校の用務員になり身を粉にして働き、少女の霊をなぐさめながら子どもたちに尽くした。

袖かけの松の伝説、松の木伐採時に事故の実話、市内に伝わる俗信、童唄やささまざまな伝承が盛り込まれ、戦後の世相とからみあいながら、人間の生き方・家族・社会のあり方を考えさせる舞台となった。「親は子に、何をしてやれるだろう？ 子は親に何ができるだろう？」の問いは今に通ずる。3400名の観客を笑わせたり泣かせたりして幕を降ろした。

5歳から70代までの3世代、合計500人を超える市民が舞台上に上がったり、裏方として支えたりした。市川在住の学会員根岸英之氏、米屋も実行委員として参画し、市内の民話・民俗資料を提供した。

この脚本の完成の背景には、前年の11月22日「語り塾(根岸・米屋他世話人)第6回公演「和爾貴美子・むかしかたり」(会場:真間山弘法寺・真間道場)〈袖かけの松〉めぐりめぐってのものがたり」があったことを添えておきたい。(千葉県)

## 事務局より

熊本市市民会館肥後琵琶再生事業検討委員会編『肥後琵琶を語る』(熊本市市民会館文化事業協会)(2004年11月)

\*《「伝え」編集委員会からのご連絡》

締切日が過ぎても、執筆予定者から数編の原稿が届きませんでした。発行日の都合もあり割愛する事にしました。ご了承下さい。

※住所変更などがありましたら、事務局までご連絡下さい。

※口承文藝にご関心のある方をぜひご紹介下さい。

☆日本口承文藝学会への入会を希望される方は、入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円、年会費 4000円です。入会申込書の請求は事務局まで。

## 【寄贈書籍】

『白い国の詩』第579号(2004年11月)

『日本民話の会会報』第176号(2004年11月)

『日本民俗学』第240号(2004年11月)

日本口承文藝学会 事務局

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 古典文学第4研究室(石井正己教授研究室)

TEL/FAX 042(329)7246 [水・金曜日、在室]

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. M. Ishii, Tokyo Gakugei University,

4-1-1, Nukuikitacho, Koganei-shi, Tokyo, 〒184-8501, Japan

☆「伝え」編集担当は、米屋陽一・大島建彦・川島秀一・小島美子です。